

編集後記：今年おきた気象災害はまさに記録破りの連続でした。実際、豪雨・台風・高温と気象に関わる極値が多数の地点で更新され、これまでの観測史上最大（最高）を塗り替えました。どれくらい異常だったのかが気になり、気象庁アメダス等による極値更新を調べてみました。すると、平成30年7月豪雨では、最大1時間降水量の観測史上1位を14地点で更新し、最大48時間降水量については124地点で観測史上1位を更新しました。また、7月中旬から8月下旬にかけての全国的な高温では、7月23日には熊谷で41.1℃と国内の統計開始以来最高気温を記録したうえに、期間中になんと全国201地点で日最高気温の観測史上1位を更新しました。さらに、9月の台風第21号では、最大瞬間風速の観測史上1位を100地点で更新しました。アメダス全体では雨量観測点が約1300、気温・風の観測点が約1000地点ですから、雨・風は約1割、気温に至っては約2割の地点で極値が更新されたこととなります。こうやって極値更新だけをとりだしてみても、

今年は極めて規模の大きな気象災害が連続して起こったことがわかります。

こういったこれまでにない状況において、気象庁をはじめとした防災関係者は積極的に情報発信し、豪雨・台風・高温に対する備えを呼びかけていました。特に、高温についても気象庁は「災害」という言葉を使って、その異常さを伝えようとしていたのが印象に残りました。

気象に携わるものにとって、どういった現象であったか記録を残すことに加えて、どういった危険性があるかを的確に伝えることは、いずれも重要です。本誌「天気」も、気象学の知見を広め、今後の災害対策につなげることが可能な情報伝達手段の一つです。今年発生したたくさんの顕著な気象現象の解析は、今まさに学会員の方々が精力的に取り組まれていることかと思えます。今後「天気」にそれらの研究成果が発表されることをお待ちしております。

(林 修吾)